

ゆるやかな坂道が下りにかかるると、老俳諧師超石の黒い影も道の向こうに見えなくなった。

真新しいワラジが土を噛む音が聞こえるだけで、風もない。両側の木立の間の空の色が見る見る明るみを増して、足元がしだいにはっきりと見えるようになった。

木立が途切れる向こう右手には、傘狂の家に向かう途中で見た、伊吹山の大らかな姿が見えて来るはずである。

そう思つて木立が終わる辺りに目をやったミチは、おやつ、ともう一度視線を集中させた。幹の陰に人影らしいものが見えたのだ。

明るくなつて来たとは言え、人通りもまだ無い街道の木陰に、身を隠すように立つ人影は不気味である。心臓がどくんと一つ、大きく脈動した。

素知らぬ振りで通り過ぎようとするミチに向かつてその人影が「菊車さん」と声をかけた。

見ると人影は一人ではない。5、6人は居る様子。子供らしい影も有る。

何と、声をかけて来たのはおとよだった。それに、村の衆とおとよの子供武蔵も一緒だった。

「脅かしましたか？すみません。傘狂先生に知れると叱られるので、こつそり先回りをして来ました。どうしても見送

りがしたくて……」

そう言いながら、もう、おとよは涙声になっている。

「何か旅の役に立つものと思うけど、貧乏な百姓の家には何にも無くて。干飯(ほしいい)と梅干し(だけ)持って行つてもらえますか？」と竹皮の包みをおずおずと差し出した。

ミチが背負つた背中の包みは、捨てがたい餞別のあれこれが、既に旅の煩いになっている。

「ただ、おとよの折角の気持ちを無下にはできない。これほど迄気遣つてくれるおとよと村の衆に、ミチはむしろ申し訳ない気持ちにさせられるのだった。

「本当にこれほどまで気遣つていただき有難うございます」とミチが頭をさげると、おとよ達は口々に

「こんな物で済まないけど」「気を付けて」等と言いながら、くの字に身体を折つて頭を下げた。

それを見てもう一度ミチが頭を下げると、今度は膝に頭が付くほど全員が頭を下げた。

歩き出したミチの背後から「元気で」とか「必ず帰つてきて」という声が続いて来た。その声に交じつて、伊吹山の方からホトトギスの声も聞こえて来た。

関ヶ原から中山道を外れて北国脇往還に入った。右えちぜん、左おうみと刻まれた碑が道の角に立っている。

来た道を振り返えると、反対の辻には、左みの、右くわな

と書かれた碑が立っていた。

「いよいよ、ひと月ほどお世話になった美濃とも別れて本当の旅が始まる、そう思うと、ミチは自分を待ち受ける新しい世界に心が浮き立つのを止められなかった。」

伊吹山がどんどん近くなり、山裾を巻くようにはるばると道が、遙か西へくと続いている。

卯月の空は少し潤んでいるようだが、雲一つ無く晴れ渡って幸先の良い旅立ちになった。ミチの心は軽く、何処までもずっと歩き続けて行けそうな気がしていた。

翌日もいい天気だった。余呉川に沿って歩きながら、昨日は左手遠くに琵琶湖が見えていたが、それが見えなくなると両側に山が迫って来た。

今日もホトトギスの声が聞こえている。間もなく越前だろう。

行く手に関所が見えて来た。門の前に役人らしい人影が見える。近づくると瓢箪に目鼻をくつつけたような、頼り無げな男が寄って来て

「女一人で何処へ行く？」と聞いた。

聞かれたミチは、頭陀袋から通行証を取り出しながら

「北陸、東北から江戸に参ります。」と応えた。

「何だと、ふざけた事を言うにも程が有る。女ひとりで北陸、東北だと？そんな理由で関所が通れるとも思っている

のか？何時から旅をしている？」

「昨日からです。」

「着ているものが綺麗だからそうだろう。悪い事は言わん。此処から引き返せ。通す訳にはいかん。」

瓢箪は通行証には目もくれず、犬でも追うようにミチを追い立てた。